



# と い で の

校訓 「自立・創造・敬愛」

4月1日よりホームページが移転・リニューアルしました。ブックマークの変更や再登録をお願いします。



高岡市立戸出東部小学校  
令和6年2月15日発行

## 非認知能力を育てましょう

校長 吉田 真寿美

冬場は、朝運動の時間や休み時間に「なわとび運動」をしている姿をよく見かけます。子供たちが一生懸命「なわとび運動」に取り組んでいる姿を見ると、「非認知能力」が育っているな、と思うことがあります。「非認知能力」とは、興味や意欲、協調性、自信等、人の内面に関する能力を指します。これはテストの点数のようにはっきりとした数値で測れないものですが、これからの時代を豊かに生きていくために大切な要素とされています。一方、これまでも大事にされてきた、教えられ覚えたことをテストの点数で測定することのできる力が「認知能力」です。「認知能力」と「非認知能力」は関連し合って、相乗的に伸びていくと言われています。



「なわとび運動」で、まだ自分が跳べない跳び方に挑戦している子供は、どうしてもその跳び方ができるようになりたいという目標をもっています。その情熱によって、ひっかかっても、ひっかかってもチャレンジします。頑張る力がわいてきます。何度やってもできないと、「もうやめようかな」という気持ちになることもあります。が、「絶対跳んでみせる！」という気持ちが勝って練習を続けます。また、子供には、これまでの経験があります。頑張ったらできるようになった経験です。「前跳び、後跳びができたんだから、あや跳びもきっとできるはず」と自分を信じて練習を続けることができるのです。



友達の様子を見て学ぶこともあります。友達の跳び方を見て憧れ、自分の目標にする場面や、「教えてくれてありがとう」「数えてくれてありがとう」と互いに敬意を払う言葉をかけ合う場面も生まれます。ついに跳べるようになるとそれが先行経験となり、新たな自信が生まれ、次の目標をもち、友達と励まし合い、さらに高みを目指していきます。このとき子供は、あや跳びが跳べるようになっていただけではありません。その過程で、目標への情熱、頑張る力、自己抑制の力、自尊心、他者と協働する力、相手への敬意、思いやり…を育みながらあや跳びも跳べるようになったのです。



これからの教育は、「認知能力」「非認知能力」を共に育てていく教育です。私たちは、チョーク&トークの一方向的、一斉的な授業から、一人一人の興味・関心や学びのスタイルを尊重した授業へと移行し、後伸びにつながると言われる「非認知能力」を育てていこうとしています。

「非認知能力」を育てるためには、学校と家庭の連携が重要です。以下のポイントを意識して活動することがおすすめです。子供たちの今後の資質・能力の伸びには、周りの大人たちの関わり方が大きな影響を与えるからです。

- 1. 子供の好奇心や関心を尊重する：**  
子供が興味を持ち、楽しいと思える内容で遊ぶことが大切です。意欲的に物事に取り組むと、非認知能力が育まれます。
- 2. 自己選択させるようにする：**  
子供が「やってみよう」と思ったことを尊重し、選ばせることで自己肯定感を高めます。
- 3. 愛情を注いで自己肯定感を高める：**  
子供のありのままの姿を認めて受け入れ、前向きな考え方を促します。
- 4. 子供が安心できる環境を作る：**  
安心感を与えることで、子供は物事に挑戦しやすくなります。
- 5. 他者と交流する機会を積極的に作る：**  
友達や家族との関わりを大切にすることで、社会的な能力が育まれます。